

幕末明治の写真師列伝 第三十五回 鈴木真一 その六

明治31年(1897)4月3日、鈴木真(初代鈴木真一)に突然の不幸が起こる。娘、ヨニ子が四人目の子の出産で、産婆の不慣れな鉗子分娩により母子共々亡くなってしまったのである。そのためまだ幼い三人の子供たち(静子、武彦、ヒデ子)は当分の間、四十(よそ)の家で養育されることになった。

すでに老境にいる鈴木真(初代鈴木真一)にとって、この末娘の突然の死は耐え難い悲しみであった。鈴木真(初代鈴木真一)はこのヨニ子の写真を大きく引き伸ばして複写すると自分の部屋に飾り、またこの写真を元に陶板にも焼き付けて、ヨニ子の長姉、信子、次姉、三七子の家に配った。その後、ヨニ子の子供たちは四十の妻、英子(ジェシー)より英語を教わり、後には日英同じように話せるようになったという。

明治39年(1905)10月10日、ヨニ子の夫、三原三郎は小々高一左衛門の妹、みさと再婚することになった。みさは東京女子師範学校卒業の才媛で、和裁、生け花、茶道などの女性一般の教養も身に付けた女性ではあったが、裕福な家庭で育ったお嬢様で、教師経験もあったのだが子供嫌いであった。そのため残されたこの先妻の子供たちにも辛くあたり、後に子供たちはこの継母のいじめに堪えかねて家出して美遠子の元へ来たこともあったという。その後、みさは三原三郎との間に正彦、文彦、キヨ子の順で三人の子を産んでいるが、先妻の子供たちと自分の産んだ子供たちとははっきりと区別して、その後も先妻の子供たちに「ごくつぶし」「脳たりん」などと呼んで辛くあたったという。三原三郎は山口師団の歩兵連隊長として山口に赴任することになったため、三原家は山口の郊外にあった官舎に移り住むことになった。この山口時代の山口中学で武彦の親友となったのが、後に内閣総理大臣となった佐藤栄作である。しかし、女学生であった静子は、肺病となってしまった。そして、適当な療養所が見つからなかったこともあって、官舎の裏庭に作られた、畳二畳、板張り一重のバラックのような粗末な小屋で隔離されることになった。食事も一日一食で女中がそれを運び、静子はその一食を三度に分けて、細々と食べるような生活であったという。明治48年(1914)、静子は、肺病がうつるといけなからと弟や妹たちとも隔離されて会えないままこの小屋で痩せ衰えて亡くなる。この静子の死は地元新聞に「連隊長家の継子いじめ」の風刺漫画として報じられて人々の涙を誘った。武彦は姉をこのように死なせた継母を一生許せないと、みさを弁護する父に訴え、家を出る決心をしたという。そのため、武彦は祖父母を頼って東京に出て、明治中学に編入学している。

一方、鈴木真(初代鈴木真一)の次女、三七子は、兄、伊三郎の妻、きくの姉夫妻である石井政吉、ための養女となって、入り婿を迎えて石井家を継ぎ、七人の子をなした。

隠居後の鈴木真(初代鈴木真一)は、東京小石川小日向

台町三丁目九十三番地の「礪庵」で「礪庵久米仙人」と称して、画と彫刻を趣味として、愛妻、美遠子と共に毎日を過ごしていたが、大正元年(1912)、二代目・鈴木真一こと婿養子の岡本圭三が亡くなったことを聞く。そしてついに大正4年(1915)2月27日、美遠子が享年76歳で亡くなる。美遠子が亡くなる前日に詠んだ辞世の句は、「白雪の古巢の山超え郭に出て 春をしらせるうぐいすの聲」であった。鈴木真(初代鈴木真一)は、これまでたくさんの近親者を失ってきたが、妻、美遠子の死ほど虚脱感を抱いたことはなかった。そのため優しく献身的な嫁、英子の介護を受けながらも、時には「美遠子」と呟いて、遠くを見るようにぼんやりと過ごす日々が多かったという。そして、鈴木真(初代鈴木真一)は、大正7年(1918)12月18日、享年85歳で亡くなった。鈴木真(初代鈴木真一)と美遠子は、雑司ヶ谷霊園の息子、四十の墓の中で眠っている。

その後の鈴木家についても少しここで述べることにする。四十はアメリカ在住時代に科学者の高峰譲吉と知り合っていた。四十がイギリスのグラスゴー大学に留学していた際の先輩が高峰譲吉だったのだ。この高峰譲吉はデンプンを分解する酵素タカジアスターゼの発見、アドレナリンの結晶抽出に成功した世界的に有名な研究者で、後に帝国学士院賞を受賞、帝国学院会員となっている。また、実業家としても東京人造肥料会社(後の日産化学)を設立し、さらに日本におけるタカジアスターゼの独占販売権を持つ「三共」(現在の製薬会社「第一三共株式会社」)の初代社長に就任している。四十はこの高峰譲吉に請われてセール・フレーザー株式会社を退社して、高峰譲吉が日本に作った高峰商事の専務取締役となり、大正11年(1922)に高峰譲吉がニューヨークで急死するとその後を継いで社長となった。そのため日米を行き来する多忙な毎日を送り、英国生まれの妻、英子に子供たちの養育の一切を任せていたのだが、英子から日本人の美人秘書との浮気を疑われて、英子はその我慢の限界も超えたのか離婚を宣言されてしまう。そして英子は四十に「子供たちの教育をカナダのトロントで受けさせたい」と言って、大正10年(1921)頃に子供たちと一緒にトロントへ移住してしまった。このため三人の子供たちはディック、ネティ、アーサーという名にそれぞれ改名している。

四十は、大正14年(1925)9月26日、芝区芝公園第十三号地一番の二に新築の家を建てて転居する。しかし、その後の四十は再婚することもなく一人孤独な生活を送っていたようだ。昭和3年(1928)7月27日、四十は心臓発作のため死去。享年55歳であった。四十の墓は先に記したとおり雑司ヶ谷霊園にあるのだが、この墓を調べてみると墓石に妻、鈴木英子の名も刻まれていた。英子の没年は昭和8年(1933)2月3日であった。

(森重和雄)